
「伊丹」の由来（語源） 注釈

※1

『続日本紀』「制、畿内七道諸国郡郷名、着好字」
和銅六年(713)五月二日条(2文字とは書いていない。)

※2、

『延喜式』民部省 「凡諸国部内郡里等名、並用二字、必取嘉名」
(必ず「2字」ではなく「嘉名」だけ)

※3

3文字を2文字にしたもの
『藤原宮跡出土木簡』の文字 「下毛野国足利郡」「上毛野国車評」
下毛野→下野 上毛野→上野 車評→群馬 高志前→越前 など

※4

1文字を2文字にしたもの
木→紀伊 泉→和泉 粟→阿波 津→摂津 など

※5

『延喜式』
摂州は住吉、百済、東生、西成、島上、島下、豊島、川辺、武庫、菟原、八部、有馬、能勢。の13郡を管轄していた。さらに川辺郡は雄家・山本・為奈・郡家・楊津・余戸・大神・雄上の8郡プラス「川辺郡坂合郷」=伊丹市口酒井村？

※6

『大日本史国郡誌』『日本地理志料』『大日本地名辞書』
(伊丹地域の範囲説明比較)
為奈郷=伊丹の南、神崎の北『大日本地名辞書』
雄家郷=今山本の南に鴻池村あり『大日本史国郡誌』
雄家郷=鴻池・荻野・安倉・川面・新田中野諸邑に亘る『日本地理志料』
雄家郷=今伊丹町なるべし、此地猪名野宮在りて由邑なり。『大日本地名辞書』
昆陽郷=今の西見屋村『大日本史国郡誌』
昆陽郷=新田・池尻・寺本・山田・時友・友行・野間・東富松の諸邑に亘る。昆陽荘と称す。いわゆる昆陽寺、其の寺本村に在り。『日本地理志料』
昆陽郷=今の川辺郡稻野村是なり。昆陽寺、昆陽池等、此に在り。『大日本史国郡誌』
桑津郷=今の東西桑津村なり『大日本史国郡誌』
桑津郷=東桑津・西桑津・森本・酒井・田能・食満・中村・下河原の諸邑に亘る。御園荘と称す。盖(けだし)、其の地也『日本地理志料』『大日本地名辞書』
桑津郷=今の神津村是なり。『大日本地名辞書』

※7

「伊」について
・「伊」の意味

- ① 意味を強調する。声・動作の形容
- ② 対象の清浄さ、神聖さを示す。
- ③ 「これ・この」「かれ・かの」という意
- ④ 「多く(率)・ある(居)」状態を表わす

・「伊」のつく旧国名：伊勢・伊豆・伊賀・伊予・紀伊

・「伊」のつく現地名：伊川谷・伊子志・伊佐口・沖繩 伊江・伊良部 など

・伊丹のつく地名 〒300-2323茨城県 つくばみらい市 伊丹

〒960-1803福島県 相馬郡 飯舘村 伊丹沢

・伊丹さんの由来(伊丹系図) 『寛永諸家系図伝』『寛政重修諸家譜』『藩翰譜』

- ① 現大阪府北部と兵庫県の一部である摂津国河辺郡伊丹庄が起源。
- ② 中臣鎌足が天智天皇より賜ったことに始まる氏(藤原氏)利仁流がある。源頼朝の重臣の加藤景廉の子孫
- ③ 清和天皇の子孫で源姓を賜った氏(清和源氏)頼光流。
- ④ ほか様々な流派がみられる。

※8

「丹」について

・「丹」の意味

- ① 「あか」、「に」

ア:「水銀と硫黄が化合した赤色の鉱石(硫化第二水銀)」(例:丹砂)

イ:「赤い土」

ウ:「赤い」、「濃い赤色」「朱」

エ:「真実の心、本当の気持ち」(例:丹心)

- ② 「まじりけがなく質が良い薬」
- ③ 「不老不死の薬」

・『魏志倭人伝』(倭の物産に丹)

出真珠・青玉。其山有丹、其木有栲・杼・櫟樟・榲・櫪・投櫃・烏號・楓香、其竹篠・箠・桃支。有薑・橘・椒・蘘荷、不知以爲滋味。有獼猴・黒雉。

・『広辞苑』「青丹よし」奈良の枕詞

あおに-よし【青丹よし】アヲ・・〔枕〕(ヨモシもともに間投助詞)「奈良」「国内(くぬち)」にかかる。奈良に顔料の青丹を産出したことが秘府本万葉集抄にみえるが、事実か伝説の記録か不明。一説に、「なら」に続けたのは顔料にするために青丹を馴熟(なら)すによるという。

「あをによし寧楽(なら)の京師(みやこ)は咲く花の薫(には)ふがごとく今盛りなり」※49

・「丹」のつく旧国名 丹波・丹後・丹州など

・「丹」のつく現地名 丹波市・南丹市・積丹町など

・「丹」のつく姓名 丹羽・丹野・丹治・伊丹・丹下・鈴丹・雲丹・牡丹など

・丹という字が水や飛沫に関係があることから、猪名川が昔、入り海であった頃の伊丹台地に飛沫する荒波や、目に映る川の情景そのものが語源ではなかろうかと考察しています。

(伊丹茂=伊丹郷土史研究家)※44

・タムは鼻音で岸という意(金鴻根)猪名部氏の存在から古代朝鮮語※64

※9

『摂津名所図絵』巻六

天平勝寶元年己丑二月十五日雕之(749)『昆陽寺鐘名』

※10

『擁書漫筆』高田能与清著文化14年(1817)

天慶5年(942)伝 京都空也堂鉦鼓銘に「伊丹住光園作」

伝空也発願鉦鼓銘 毘沙門空也光勝 天慶五壬寅十一月数四十八造之 鑄師摂州伊丹住光園昨

※11

『空也誄』(くうやるい)比叡山で天台座主・延昌のもとに受戒し、「光勝」の号を受ける。

天曆2年(948)

※12

『山槐記』権中納言東宮大夫中山忠親の日記

廿三日辛未、朝間雨下、或者云、故義貞子某、住摂津国豊島、故親弘跡也、件男昨日焼く豊島宅夜中馳出、今朝過此京向近江国、兄等在彼国之故也、伊多(太)美武者所、某追之至子山科、然而早以入近江了、仍空帰云々、(後略)(イタミの初見)

治承4年(1180)11月23日条(右大臣=山槐)

武者所:院や摂関家に設けられた警護の詰め所やそこに詰めた武士

※13

『北河原森本文書』伊丹氏の祖加藤右馬允親俊(加藤景廉?)が関東御下文を拝領

親俊 → 親長 → 親元 → 親資 → 親盛・・・伊丹氏

親俊 → 宗利・・・森本氏

文治2年(1186)

※14

『近衛家所領目録』藤原頼長所領「野間莊」保元の乱後に没収官されて後院領となる。

保元2年(1157)

※15

『玉葉』昆陽野に遷都の議おこる。

治承4年(1180)

※16

『出雲国守等田地寄進状』摂津国伊舟村

出雲国守など、伊舟村の田地加地子分を多田院へ寄進する。(伊舟村の初見資料)嘉元元年(1303)9月15日

※17

『伊丹伝記』(福岡県博物館所有)

景親は伊丹城の命名に伊丹とその枝郷明岡(あけおか)のどちらを取るか迷ったと述べています。(伊丹茂=伊丹郷土史研究家)

※18

『京都東寺百合文書』伊丹左衛門三郎親盛(関東御家人)撰津国の守護代官の補佐(伊丹氏初見)

延慶2年(1309)

※19

『太平記』

伊丹四郎左衛門尉妙(好)智入道=親盛の父、親資ちかすけ

六波羅裁許状:六波羅探題が両氏を遣わす。(総合出版センター)

※20

『離宮八幡宮所蔵文書』伊丹左衛門三郎親盛、六波羅の命で幕府使者の守護使として兵庫関を
検分の注進状(伊丹氏初見=伊丹市史)

正和4年(1315)

※21

『多田荘山本四至圖』「糸溜村」記載

延元2年(1337)

※22

『森本基長軍忠状』南朝の楠木正儀が押し寄せる。(伊丹城の記載初文献)

文和3年(1353)

※23

『八坂神社文書』子細見状、伊丹勘解由左衛門尉并須田兵庫入道以下輩記載あり於;越前
貞治3年(1363)

※24

『祇園社記』伊丹勘解由左衛門尉

※25

『東大寺法華堂要録』応仁の乱後の尼崎合戦の記載の中に「板見」記載がある。

※26

『大乘院寺社雑事記』「板見兵庫」を抹消してかたわらに「伊丹」と記載している。

※27

『旧事本紀』物部木蓮子連公(もののべ いたび むらじ)

※28

『先代旧事本紀』物部木蓮子連公

※29

『天孫本紀』物部木蓮子連公

※30

『日本書紀』敏達天皇13(584)年9月条「遣難波吉士木蓮子、使於新羅。遂之任那。秋九月、從百濟來鹿深臣、有彌勒石像一軀。佐伯連、有佛像一軀。」

※31

物部の系譜

十二世孫・物部木蓮子連公(もののべのいたびのむらじのきみ)。布都久留大連の子である。この連公は、石上広高宮(いそのかみのひろたかのみや)で天下を治めた天皇の御世に、大連となって、神宮を祀った。御大君(みおおのきみ)の祖の娘の里媛(さとひめ)を妻として、二人の子を生んだ。弟に、物部小事連公(もののべのおごとのむらじのきみ)。【志陀連(しだのむらじ)、柴垣連(しばがきのむらじ)、田井連(たいのむらじ)らの祖である。】弟に、物部多波連公(もののべのたはのむらじのきみ)。【依網連(よさみのむらじ)らの祖である。】

※32

『川辺郡誌』(大正3年12月25日)

本町を伊丹と称し、また古くは有岡と称せしも之れが起源に就き何等古文書の徴すべきもの無きも各種の伝説に依れば、往昔、町の南北に板橋ありて是を越したる丘阜の地に街衢(がいく)を成せるに依り板上(イタカミ)と言ひしを後ち転訛して(イタミ)と言うとあり。又池田の地に呉織(クレハトリ)来りて紡績(イトツムギ)の業を此地にてなせるに依り絲績(イトウミ)の地といへるより来るといひ、また太古此辺一帯瀕海の地にして、後ち地形の変革に伴い細く入江となりしより、絲海(イトウミ)と称せるに拠るといひ、また稍(ヤヤ)根拠ある説としては、治承四年(1180)加藤治郎景廉、山本判官兼隆を討ちし功に依り鎌倉幕府より此地に封ぜられ、代々此地の領主たりしが七代の孫景親(一書に景範とあり)に至り、氏を伊丹と称し兵庫頭に任ぜられたり、これ伊丹の文字の出でし始めなるべしとあるも、これより5百年を遡れる聖武帝の御代天下に莊園開拓を奨励せられしが、此地の古名に津の国河辺の郡御園の莊伊丹の郷とあるより見れば伊丹兵庫頭を以て字顔(ママ)の起こりといふは当たらず。如斯其の起源につき諸説区々にして信を置くに足るもの無く、要するに「イタミ」の名は最も古きに有りしを後世に至り、種々の説を駁會わせしなりと言うの外なかるべし。

※33

『有岡古続語』坤の巻照顔齋見聞録、(梶曲阜)

有岡の地をいとうみ系海とも又系績(ウム)とも言也、応神天皇御宇に漢人池田へ呉服・穴織の二女わたり錦を織事を教ゆ也、其此今の木ノ部をハ絹延と言う也、畑村を織村と言也、伊丹ハ系績(ウム)也、皆此辺ハ呉服に連理(レンリ)ありてむかしの名なり、系海と言ハ神代西海より入海ニての名なるへし、其証拠にハ伊丹の地に井戸を掘れば二丈斗下にいつれにも蠣(カキ)から出る也、又鍛冶屋町岩印と申方の井の底に帆柱有と言、伊勢町但馬屋の井の底に帆柱有と伝、町越に向ひの底に其帆柱横に届くと伝、片井戸より其帆柱を叩けは向ひの井戸に響くと言也、むかし山崩れ海地と成る歟、神代にハ大物浦より今の伊丹・池田辺、東ハ吹田・江口のほとり迄入江にして通船あり、

※34

『有岡古続語』(梶曲阜)乾の巻

扱この帳に記る所は『有岡むかし語』おなしく余録、是ハ西谷氏午盈君(西谷午羸)の選なり

在岡の里伊丹ハいにしへ豊桜崎といひけん此はいかなる人の往来し処やらん、伝ふる書も知徳されば今さら言出へき言の葉もなし、足利將軍の時世にハ城郭ありて伊丹氏の人居せしと野史にも往々(ところところ)見へたり、其此より伊丹の名ありしにやはかりがたし。荒木村重の城となりて後、織田信長のために破らる。今猶廢壘古松などまのあたり人の知る所也、元和のころより駅ところ

と成りしかどさまで繁栄せるやうにも思はれず、いつの此よりか酒造るわさの始りて、今の姿と成たるやうにおほゆ、殊さら寛文のはしめより近衛殿の采邑と成る、されといまた一統にハあらずとなん、それより凡五十年を経て正徳のころ北少路・昆陽口・外城・外崎までも撰家の御領地と成りて繁昌せしゆへ、花美の人物向上の志操も日を追て出てきたりしと見へたり、今風流を嗜む人の丹丘といひ糸海と書し、または伊水などいふハ皆地名を俗ならぬやうに作り出せしにて、むかしより此名ありしにもあらず、又地の南北に板橋ありて、其上にある里なれハ板上(イタミ)といひしと噂さる人あれど、これとてもしかと証拠なし、たゞ豊桜崎といひ在岡のさとなといふは、まことに古き地名と見へたり、

※35

『平成18年度地域学としての摂津文化を学ぶ講座記録集』

『有岡古続語』は明治維新直前の本ですが、実は1700年代の末、梶曲阜より70年くらい前に書かれた西谷午嬴の『有岡むかし語』という本をいろいろと引用しています。そこで『有岡むかし語』を読むと「今風流を嗜む人の丹丘といひ糸海と書し、又は伊水などいふハ皆地名を俗ならぬやうにつくり出せしにて、むかしより此名ありしにもあらず」とあります。伊丹は俳句が盛んで風流な人たちが会をするときに「伊丹」を「糸海」「丹丘」と書いたり「伊水」というふうにならぶからで昔からこういう地名があったのではないと書いてあって古い地名ではないと否定しています。「又地の南北に板橋ありて、其上にある里なれハ板上(イタミ)といひしと噂さる人あれど、これとてもしかと証拠なし」と、客観的・科学的な記述をしています。にもかかわらず、これを引用した梶曲阜は「糸海」「糸績」だと自分の本で断定し、その説を『川辺郡誌』が引用して、その後も生き続けたのです。(神戸新聞総合出版センター・河内厚郎事務所) 大国正美

※36

『語源研究』(1988.4日本語語源研究会・吉田金彦)

(抜粋) 古代地名難波

大阪外国語大学吉田金彦(元大阪外国語大学教授)

大阪の古代をナニハと呼ぶかツノクニと呼ぶかは古代人の選択であった。そしてナニハをいかなる意味でナニハといったのかはわからない。日本書紀になみはや(浪速)とあるのは書紀撰者の考えを反映したもので、それが本当にそうであるか否かとは別問題である。私はすでに多い諸説のある中で、これを批判し言語・文化史的にナニハの語源はナミニハ(並庭)であるとした(「語源研究」9号昭和61年4月)。その根拠は日本書紀仁徳天皇歌謡に出てくる「押し照る難波の埼の並び浜」という語句があることと、大阪湾に古代無数の小砂州島があり、そこで歴代天皇の大嘗祭の儀礼が行われ八十島祭(やそしままつり)と呼ばれている事実があった事、それはニハ(庭)の重要な一つでマツリノニハ(朝廷)に発展するニハ(庭)でもあったことで、海人が海を庭として生活して来たことの政治的展開の形でもあった。そのような史的背景がナニハ(難波)の日本語史的説明ナミニハ→ナニハによく一致したのである。日本語の証明は形と意味と、その両方からその変遷の跡付けが行われなければ、証明されたとは言い難い。

このナミ(並)には二つ以上のものがナラブ(並)ということと同時に、そこが良い所として安心して棲む、隠れてそこに居るというナブ(隠)の意味も持って連なっている。難波の地が渡来人にとって

一先ず落ち着くべき平穏な土地であると認識したところにナミニハつまりナニハという語の動機付けがあったわけでナニハをアイヌ語で解くこともできるが、まず日本語として完全に理解するとともに、また無理ではなかったのである。

※37

『語源研究』(1988.4日本語語源研究会・吉田金彦)

(抜粋) 古代地名ナミ(並)ニハ(庭)

大阪外国語大学吉田金彦(元大阪外国語大学教授)

ことばは決して孤立しない。普通のことばの基本的な語彙がいくつか選択され、その中のいくつかを組み合わされて古代地名が出来上がっており、したがってよく似た地勢には同じ時代の命名なら同じ名前の地名が同時多発的に各地に生ずる可能性があることになる。したがって、なには(難波)がナミニハ(並庭)だという事が信じられるとすると、次には、ナミ(並)やニハ(庭)が基礎語彙としてそれぞれまた別の地で別の語形に選ばれて違った地名を形成しているに違いないことが推定される。(4パターンに)モデル化して考える。

①ナミ(並)が上に来る場合 信濃国伊那郡波合(ナミアイ)『万葉集』

大和・宇陀郡浪坂(ナミサカ)『和名抄』

②ナミ(並)が下に来る場合 播磨国印南郡(イナミ)『和名抄』

③ニハ(庭)が上に来る場合 備中国賀陽郡庭妹(ニワセ)『和名抄』

④ニハ(庭)が下に来る場合 出雲国簸川郡神庭(カンバ)

このような見地からナミのつく地名①の場合ナダ(灘)が考えられ、ナミのつく②の場合はイタミ(伊丹)が考えられる。

※38

『語源研究』(1988.4日本語語源研究会・吉田金彦)

(抜粋) ナダ(灘)の語源

ナダ(灘)が文献上あらわれるのは中世からであるが、遺跡の発見などから、万葉時代からある語である。『神戸市灘区の歴史』有井基氏

語源として、辞書などには、ナダレ(傾・雪崩・宥)波打ち際・砂浜・沖・波激などがあるが、万葉時代からある語ということを重視すると、万葉集に「昨日こそ船出はせしか鯨魚(イサナ)とり比治奇乃奈太(ヒジキノナダ)を今日みつるかも」(巻17-3893)とあるようにナダという地名的用法がみられる。神戸地区の灘についていえば、少なくとも中古の歌枕によまれた芦屋灘があり、その岸辺が灘辺でナダベがナダメとなって中世以降灘目の語が通用し、一般に灘が地名として用いられたと言われている。はじめは住吉川の魚崎を中心に東を中灘、西を大灘とっていたから、ナダ(灘)が広がっていることを知る。

万葉時代すでに地名化の傾向にあったナダ(灘)だとすると、それ以前からナダがナダという語形であったかどうかは保証の限りではない。それはナダのナはn系鼻音で、この語音はもっと別の語を祖形に持つ場合が少なくないからである。その音の影響を受けて濁音のdaがあることも考えられるからナダのダはもと清音だったかもしれないという推定が必要になってくる。その場合、ダは①接尾辞か、それとも②独立語なのか何れかだが、どうも後者②らしい。②であるとするとなタ(田)が考えられている。ナダ(灘)は、<n音系の語+田>ではないか。中世の小字名に用いられた「田」は工作伝

の状況を示すものであった。それに対し、文字以前の縄文・弥生時代から存したと思われる古代一音節日本語の中に、ある一定の空間を示すタ行音語、tu, to, ta……などの一群があって、その中にあるものはtu(津)に、あるものはto(処)に、あるものはta(田)にそれぞれ分化したものかもしれない。そしてその中のtaは古代日本人がその地を利用し、そのti(道)で生計を立てた空間を元来意味していたのが、次第に田を耕して稲作をするようになって、稲作田を意味するように限定されてきたのであろう。国語の解釈と考古学的発掘との結果をドッキングさせると田のつく地方には縄文末期弥生時代の遺跡がある事が少なくない。「田」という日本語は日本人の稲作文化とともに広がった語のようである。

日本書紀によると、神功皇后摂政元年二月の条に新羅から帰り、摂津に来た文のところに「御心を広田国(ヒロタノクニ)」「活田長峽国(イクタナガサノクニ)」「御心の長田国(ナガタノクニ)」という表現が三つ続いて出ている。ここにいう広田国は現在では西宮市大社町の広田神社辺であり、活田長峽国は神戸市生田区辺でその中心とされているのが生田神社であり、長田国は神戸市の長田神社を中心とする長田区辺をさしている。そして注目すべきは広田国・活田長峽国・長田国の三国とも「田」がついたところの国名になっている。田のついたところが、4世紀ころ支配者のある治領下にあったことを示すもので、これらの「田」は弥生人が住んだ処を意味する良い例となろう。まさに「御心を広田の国に居らしむ」「活

田の長峽の国に居らむとす」「御心の長田の国に祠れ」とかいうように、田のある国に“居る”とか“まつる”とかいっているのは、田のところが居住地として、また政治するに良い地だったことを示している。

東から順に広田・生田・長田と拠点的に並んでいる。摂津国一覽図でこれを見るとヒロタの在所は津戸川の左岸、生田は古代三国として、のちの武庫郡・菟原郡・八部郡の中心的役割を果たしていたのであろう。それが東西に3つに並んで南の海に臨んでいたわけである。

このような地理的状況からすると、まさにこの地方を言ったナダ(灘)という語は古代三国が並んだということ、つまり稲田が並んでいるというナミ(並)タ(田)なのではないだろうか。言語音的にも、namitaは容易にnamitaに変じうるし(狭母音脱落)、nami-ta>namta(同)>nanta(唇音退化)>nanda(鼻音連濁)>nanda(成音化)という変化は極めて自然なことである。

※39

『語源研究』(1988.4日本語語源研究会・吉田金彦)

(抜粋)「比較地名の手法で語源が分かる」

ナミタ(並田)からナダ(灘)ができたのではないか。そうだとすると、個々の田をいっているのではなくて、沢山の齋田が並んでいる。その田のあるところ、という意がナダ(灘)の意味になってくる。そうすると、ナダ(灘)は現在、播磨灘とか熊野灘とかのように広々とした海洋をいうのとは違って、そういう広くて荒れやすい海に面した陸地を元来はいったものとなってくる。ナダの起こりは海面や水上自体をいうのではなくて、その海から見、水上から上陸しようとした人たちの立場から陸上の地を言ったものとなる。人間の見る目を丁寧に導入して語源を考えたいのである。ナダ(灘)は陸上から水上へ移動している。絵図に則して眺めてみよう。芦屋沖、つまりこれが、芦屋灘とすれば、芦屋灘に向かって東西に海岸が続いている。そこへ川が何本も北の六甲山から流れ出ている。10余条の河川が南流して海に注いでいる。海上から渡来した人たちはこの河川のどこからでも川沿いに侵入でき

るし、また、東西をつないで磯伝いに河口を渡ることもできたわけで、六甲山南麓に発達した河川沿岸の田の多さが推測できる。河川は北の六甲山系から流出しているので多く天井川の性格があるが、花崗岩を透した水は飲料に良い。絵図でも、武庫山・六甲山・ミカゲ山・摩耶山・再度山・鷹取山と横に並んでいる。川は川で並び、山は山で並び、したがって、来て住んだひとたちも田を並べて生活した所、そういった意味がこの地にはある。タ(田)は住むに良い処を意味しているが、ナダ(灘)はまさにナミタ(並田)として巨視的解釈によって解決がつきそうである。

元来、ナミ(波)は高低の起伏をいうよりも、その起伏が連なっているナミ(並)をいうのであり、並んでいるというのは起伏があまりひどくはない同等の高さに並ぶものでなければ、ナミ(並)とはいえない理がある。高くても低くても要するに並ぶということは、それらの個々の山が顕著に目立つことは無いから、心安まり、隠れ棲むという感覚につながる。ナミ(並)がナビ(隠)という意に転じるのもそのためである。

このように一地名の研究は一地名だけの研究に止まらず、他と比較照合することによって、真実が相互的に証明され、このような比較地名学の方法は同時に、日本語の古代語における語源や意味変化の実態を明らかにしてくれる。以上示した西摂ナダ(灘)の解釈は先に提案したナニハ(難波)がナミニハ(並庭)であるとの歩調の揃った解釈になるからである。

摂津国が東部は山のない大河の河口ばかりある地で、わずかに上町台地があるにすぎない所であったからナニハ(難波)はナニハ何々(海・津・潟・小江・路・処(ド)・崎・国)など言われたのに対し、西部摂津は山あり海あり川ありで、はるかに変化に富んでいて、広田・生田・長田など三つの田の国を中心とした灘の地だ。まさにナミタ(並田)であり「並斎田・並稲田」の意味として、難波の都を支える宮地にもなっていたことが考えられる。

※40

『語源研究』(1988.4日本語語源研究会・吉田金彦)

(抜粋)イタミ(伊丹)の語源はイタナミ(斎田並)

ナダ(灘)がナミ(イ)タであることを参考にすると、もう一つこの近くで解ける地名がある。それはナダの語順を逆にしたと思われるイタミ(伊丹)で、その語源はイタナミ(斎田並)であろうと推定できるからだ。

伊丹は灘のすぐ東、摂津国河辺郡にあり武庫川と猪名川にはさまれた武庫平野の中心でその歴史は灘よりも古い。川沿いの沖積地と旧猪名野段丘を利用して縄文・弥生文化が拓け、猪名野が先進地であったことは史的・考古学的に証明済みである。

『和妙抄』に伊丹というのは河辺郡に出ていない。しかし川辺郡誌がいうように伊丹という語が古名であるというのは当たっている。私はイタミ(伊丹)はやはり万葉時代以前からの語で、その語源はイターナミというナミ(並)を複合語後項に持つ語であると思う。ナダ(灘)はナミが複合語前項として融合した形であったのに対し、イタミ(伊丹)もまた複合語後項として融合した形であったと推定される。イタミ(伊丹)のイタはイタ(斎田)またはイナタ(稲田)を意味しあとのミはナミ(並)が2音節とも鼻音であるために約まってm音になったもので、要点的にいえば、ita-nami>ita-ⁿmi> itami > i-tamiのように変化した。狭母音のi

がここでは語頭音として独立して「伊」の文字が当てられた。また、m-n音交替による誤用だとみるよりも、尾音のmとnの区別のつかない人たちの手でn音系の文字「丹」(tan)が宛てられたのだ

と表記面に関して理解すべきところである。

近世の地名の小字に「田」が多くついていることは周知のとおりであるが、伊丹市においても同様である。猪名川が直接海に注いでいたデルタ地帯には園田・田能・池田などがあり、猪名川の流域が弥生時代の農耕稲作文化の地であったことが明らかであるから、「田」が多い。

イタミ(伊丹)はここでもまた猪名川に臨むイタ(斎田)ナミ(並)連なった土地という意味の反映があるとしてよい。イタミ(伊丹)がイタナミ(斎田並)であるもう一つの証は、イタミと変ずる前の完全なもとの形が地名としてあるからである。イタミ(伊丹)=イタナミ(斎田並)という地名の存在で完全である。全国に2つ丹後と播磨にある。丹後国与謝郡板列(イタナミ)は今岩滝町男山八幡のあるところで、阿蘇の内海に南面する神々の斎田の地である。もう一つの播磨国多可郡板浪は風土記に「花波山は近江の国花波の神此の山に在す。故因りて名と為す」とあり、大日本地名辞書ではこの「花波山」のことが「板浪」だとしている。(現在は板波と書いてイタバと読む)

古代日本語で語が複合する時、形容語が先に来てもまた後に来てもどちらでも良かった。「美しき花、咲きたり」の主語「美しき花」は「花の美しき」とも表現できる。「白き霜」と同じ意味で「霜の白き」ともいう。形容語の自由性が地名にも行われていたようで「並んだ田」といっても「田が並んでいる」といってもよかったようである。前者の発想がナミ(イ)タであるナダ(灘)であり、後者が、イタナミであるイタミ(伊丹)となっている。

※41

『語源研究』(1988.4日本語語源研究会・吉田金彦)

※42

伊丹市史(伊丹市)

※43

新・伊丹史話(伊丹市立博物館)

※44

伊丹歴史探訪(小西酒造)

※45

『絲海』第2号(伊丹市文化財保存協会)

小井の清水 バス停小井の内の所を少し南へ下がった旧道の北側にある。石でかこい、石の蓋がしてあり「小井の清水」と刻まれている。

摂陽群談

「猪名野なる宝の山に入りぬれば心も清き小井の清水(詠人不知)」

伊丹市文化財ボランティアの会「火曜会通信」第7号

「小井の清水」という古びた石囲いの井戸があります。行基さんが悪病封じのため掘削された井戸で、この水を使うことにより疫病が治癒したと話してくれました。

昆陽組邑鑑<伊丹市立博物館史料集(市立図書館蔵)>

小井清水石之無同御座候 但小井清水之銘御座候上は小井内二往古より居住仕候佐藤町分百姓甚兵衛と申者之屋敷之内二御座候行基菩薩加持水之由、諸病二用別而砲術二甚其徳御座候行基菩薩の詠歌

※46

『日本語大辞典』(小学館)

※47

『大言海』(富山房)

※48

『字源』(角川書店)

※49

『広辞苑』(岩波書店) ※8

※50

『岩波古語辞典』

※51

『日本語語源辞典』(現代出版) 清水秀晃

※52

『時代別国語大辞典上代編』(三省堂)

※53

『地名語源辞典』山中襄太(校倉書房)

イタミと読むのは誤用か、あるいは二の音がミにかわったものか、ニとミと変る例は多い。

※54

『角川日本地名大辞典』二十八兵庫県(昭和63年10月8日)(角川書店)内山理三

「川辺郡誌」「有岡古続語」の引用 ※32・33

※55

『大日本地名辞書』(摂津河辺郡)(富山房) 吉田東伍明治33年(1900)

伊丹町、今戸数千八百(大坂を去る四里余池田を去る一里余)醸酒太だ盛なり。旧事本紀に「宇摩志麻治命十二世、物部木蓮子(イタビ)連公、石上広高御宇(仁賢)天皇御世為大連」と伊丹の名は木蓮子連に由縁あるか詳ならず、但し丹字は多仁に仮るべきも、多美に仮るべからず、亦疑なきにあらず。史徴墨宝考に貞治元年(1362)伊丹基長の軍忠状ありと云えば旧族の在りしを知る。

※56

『日本古代地名事典』(新人物往来社) 吉田茂樹

木蓮子=クワ科の常緑低木、食糧

※57

『日本地名大事典』(新人物往来社) 吉田茂樹

同上

※58

『日本地名語源事典』(新人物往来社) 吉田茂樹

①同上

※59

『ひょうごの地名』(神戸新聞総合出版センター) 吉田茂樹

①同上、②板樋の転訛

※60

『地名用語語源辞典』(東京堂) 楠原佑介・溝手理太郎

イ(接頭語)タミ(撓・廻)という地名か。

イタ(損・傷)ミ(辺の転)という地名か

あるいは動詞イタム(傷)の連用形か

※61

『市町村名語源辞典』(東京堂出版) 溝手理太郎

※62

『古地図で見る阪神間の地名』(神戸新聞総合出版センター) 大国正美

※63

『おもしろ地名・駅名歩き事典』(みやび出版) 村石利夫

※64

『地域研究いたみ』(伊丹市立博物館) 第12号 郷土史家 (金鴻根)

古代朝鮮語、猪名部氏存在からイはこれ・このであり、ムは鼻音で岸という意から、タム・タンが「い・む・ん→ミ」に転化した。

年表

584(敏達13)	年9月条『日本書紀』敏達天皇「遣難波吉士 木蓮子 、使於
749(天平勝宝元)	『昆陽寺鐘名』に『 伊丹坂 』記載、後年の作?
759~780年	『万葉集』の完成 猪名野 の認識→ 歌枕 原野・野原のイメージ
844年(承和11)	10月9日 両度勅旨、定川辺郡 爲名野 、可遷建国府(続日本後記)
887年(仁和3)	猪名野笹原 に遷都議(この都とは(国府)のことか)
942年(天慶5)	伝 京都空也堂鉦鼓銘に「 伊丹 住光園作」
1157年(保元2)	藤原頼長所領「 野間莊 」没収後院領
1180年(治承4)	摂津国 昆陽野 に遷都の議おこる「玉葉」
1180年(治承4)	源頼朝伊豆で拳兵
1180年(治承4)	平維盛(福原)→ 昆陽野 → 京都 → 富士川
1180年(治承4)	11月23日 伊多美武者所 某、(イタミの初見)「山槐記」
1185年(文治元)	伊丹氏 の祖 加藤右馬允親俊が拝領(北河原森本文書)

1186年(文治2)	
1294年	西桑津・中村地名
1303年(嘉元元)	9月15日出雲国守など、伊丹村の田地加地子分を多田院へ寄進する。 (伊丹村の初見資料)。1304年(嘉元2)の説あり
1309年(延慶2)	伊丹左衛門三郎親盛(関東御家人)撰津国の守護代官の補佐(伊丹氏初見)(京都東寺百合文書)伊丹四郎左衛門尉妙(好)智=親盛の父、親資
1315年(正和4)	伊丹左衛門三郎親盛、六波羅の命で幕府使者の守護使として兵庫関を検分の注進状(離宮八幡宮所蔵文書)(伊丹氏初見伊丹市史)
1331年(元弘2)	足利尊氏側で楠木正成とたたかう。大阪天王寺から撤退し、伊丹河原でたたかう。
1337年(延元2)	『多田荘山本四至圖』「糸溜村」記載
1352年(文和2)	「森本基長軍忠状」(伊丹城の初見)南朝の楠木正儀が押し寄せる。
1363年(貞治2)	子細見状、伊丹勘解由左衛門尉并須田兵庫入道以下輩 「八坂神社文書」「祇園社記」記載あり、(伊丹市以外での記載)
1459~1483年	「東大寺法華堂要録」応仁の乱後の尼崎合戦の記載の中に「板見」記載がある。
1450~1527	「大乘院寺社雑事記」では「板見兵庫」を抹消してかたわらに「伊丹」と記載している。
1568(永禄11)	信長傘下撰津国三守護・池田勝正・和田惟政・伊丹親興